

インドにおけるテキスタイル・アパレル産業の 発展の経緯と今後の展望

Progress of Development and the prospect of future in the textile and apparel industry in India

野田 隆弘

Takahiro NODA

Abstract

Some developing countries in Asia have been set to industrialization. India in south Asia is one of them. In 2003, the 7th Asia Textile Conference was held in New Delhi and I delivered an oral presentation. After this conference, I visited two sewing companies and researched their sewing technology respectively.

After that I researched and examined about the progress of development and the prospect of future in the textile and apparel industry in India. The main subjects are the amount of the cotton production, the amount of the synthetic fiber production, the trend of spun yarn, the number of spinning machinery, the number of fabric machinery, the export of textile manufactures, the export of apparel manufactures and so on.

Keywords: textile apparel India

1. 緒言

アジアの発展途上諸国においては工業化への取り組みが積極的になされている。南アジアに位置するインドもその1つである。2003年にインドの首都ニューデリーで第7回ATC(Asia Textile Conference)が開催され、この会において口頭発表を行う機会を得た。この会が終了後ニューデリー市内の2つの縫製工場を視察する機会を得た。これらのことから、インドにおける今日までのテキスタイル・アパレル産業の発展の経緯と今後の展望について調査・検討を行ったので、その概要を記す。

2. テキスタイル・アパレル産業の発展の経緯

2.1 綿花の産出量の変遷

図1は1992年から2003年まで12年間のインドにおける綿花の産出量の推移を示す。インドは古くから綿花の大産地であり、1992年から2003年にかけて常に中国、アメリカに次いで世界で3番目の産出量を示している。横軸に西暦を縦軸左目盛りは産出量、右目盛りは全世界の産出量に対するインドの産出量の比率を示す。この図から12年間にわたり、産出量は隔年おき、もしくは数年ごとに増減を繰り返しているが、ほぼ250万トンから300万トンである。そして、全世界に対する比率は12~14%

で推移している。また、産出量の増減と並行してこの比率も増減している。産出量の増減と比率の増減がほぼ同じ傾向を示していることは取りも直さず、全世界の需要量がそれほど拡大することなく、ほぼ飽和していることを示している。

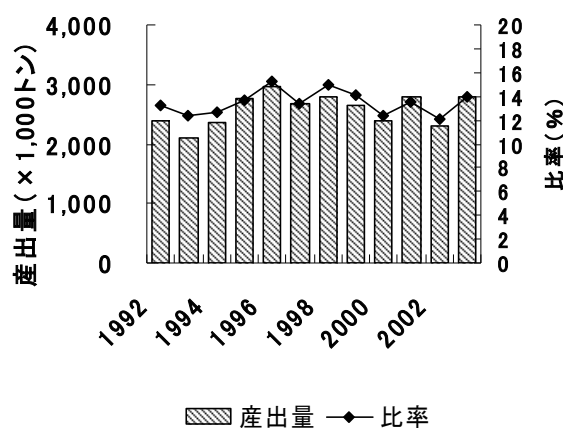


図 1 インドにおける綿花の産出量の推移

2.2 綿糸の生産量の推移

図2に1992年から2001年まで10年間のインドにおける綿糸の生産量の推移を示す。1992年から2001年までの間に生産量は150万トンから230万トンに約50%ほど着実に伸ばしてきている。これを全世界に対する比率では15%から23%程度に増加してきている。先の綿花ほどではないが、この綿糸の生産量においても生産量とその比率の増減傾向はたいへん類似しており、和していると思えば差し支えない。

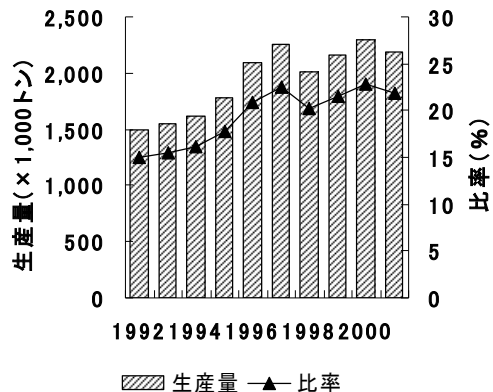


図 2 インドにおける綿糸の生産量の推移

2.3 インドにおける合成繊維の生産量の推移

1996年から2002年間の合成繊維の生産量の変化を図3に示す。ここで合成繊維はナイロン、ポリエステル、アクリルの三大合繊の和に限定している。わずか7年間であるが、90万トンから170万トンと2倍近くも増加していることを示している。そして、1996年当時は世界で一番目であったが、2002年では中国、台湾、アメリカ、韓国に次いで世界で4番目の生産国である。しかし、その比率は4%から6%へわずかしき増えていない。このことは全世界で、インドの生産量以上に生産されていることがわかる。同時に合成繊維は全世界では総需要が増加傾向にあることも示している。

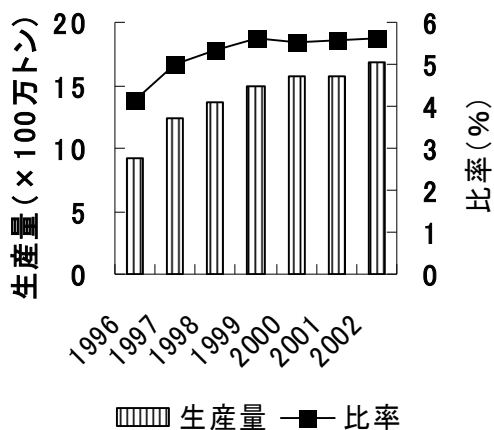


図 3 インドにおける合成繊維の生産量の推移

2.4 短繊維紡機の設置錠数の推移

さて、前述のように原綿、糸の生産状況が明らかとなった。これらを使用して(どれだけかは輸出されているが)糸を生産する設備の状況を検討する。図4は1990年から2001年までの12年間の綿などの短繊維を糸にするための設備の設置状況を示したグラフである。1990年は2500万錠であったが、2001年には3800万錠と約50%も増加している。そして比率では17%から25%と同じく47%も増加している。すなわち、1990年には世界の約1/6の設置状況であったが、2001年には1/4となり、中国を抜いて世界で第1番の設置状況となった。このことはほぼ自動的に短繊維紡績糸の生産量の増大につながり、世界の短繊維糸の工場となった。

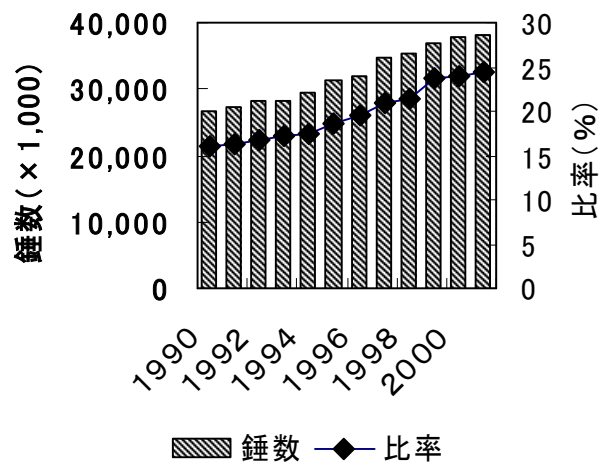


図 4 短繊維紡機の設置錠数の推移

2.5 OE紡機の設置錠数の推移

短繊維紡機と並んでOE紡機も短繊維糸製造に不可欠である。図5に1990年から2001年までの12年間のOE紡機の設置錠数の推移を示す。1990年当時は5万ローターであったが、12年後の2001年には約500ローターと9倍も設置されている。これに伴い、その比率も1%程度から6%へ大幅に比率を伸ばしており、2001年には中国について、世界第2位となった。今後も積極的にこの紡機が設置される気配を感じる。

2.6 綿織機の設置台数の推移

次は生産された糸を用いて織物の製造を行うという段階に入る。織物製造する機械には従来からの有籽織機と高効率生産を行う無籽織機のタイプがある。

(1) 有籽織機

最初に伝統的な有籽織機の設置台数の推移を考察する。図6は1996年から2001年までの6年間の有籽織機の設置台数の推移を示す。おおむね11万5千台から13万台の間で増減を繰り返

インドにおけるテキスタイル・アパレル産業の発展の経緯と今後の展望

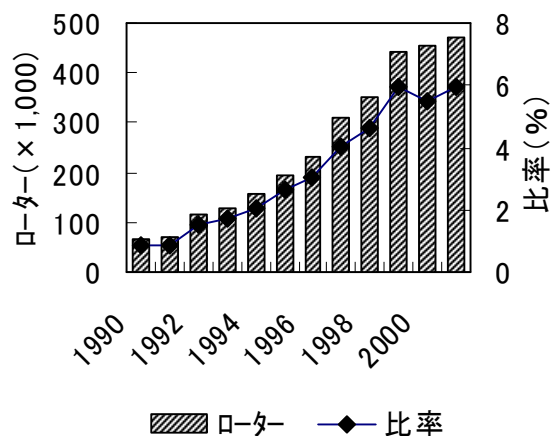


図 5 OE紡機の設置錘数の推移

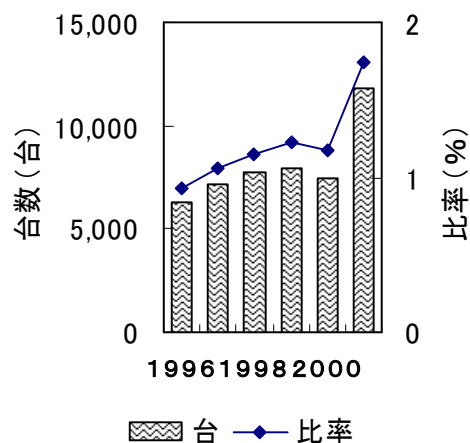


図 7 無籽織機の設置台数の推移

返している。その比率の推移は8%から9%ほどである。2001年では中国、インドネシアについて第3番目である。インドではまだ、設置台数の増加が予測されるが、世界的な潮流としては生産性の低さ、品質レベルの低さに起因して減少傾向にある。

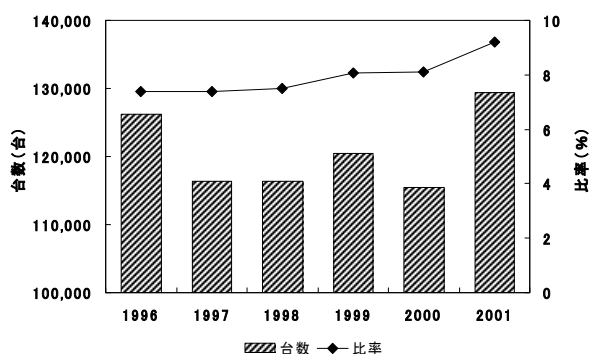


図 6 有籽織機の設置台数の推移

(2) 無籽織機

さて、次は省力化、高生産性、高品質が確保できる無籽織機について考察する。図7は1996年から2001年までの6年間の無籽織機の設置台数の推移を示す。1996年には6千台であったが、2001年には2倍の1万2千台ほど設置されている。特に2000年から2001年のわずか1年間に7,500台から12,000台と57%も増加している。しかし、その比率は1%から1.8%と小さいので、世界的視野から見た場合には今後の導入計画が期待される。ちなみに世界で最も導入されている国は中国、タイ、インドネシアと続き、インドは9番目である。

3. テキスタイル・アパレル製品の輸出動向

(1) 図8は1996年から2000年までのテキスタイルの輸出状況を示す。毎年500~600万ドル程度輸出されている。その比率は3~4%程度である。生産量の増減と比率の増減がほぼ対応していることから全世界での生産量はほぼ飽和していると思われる。

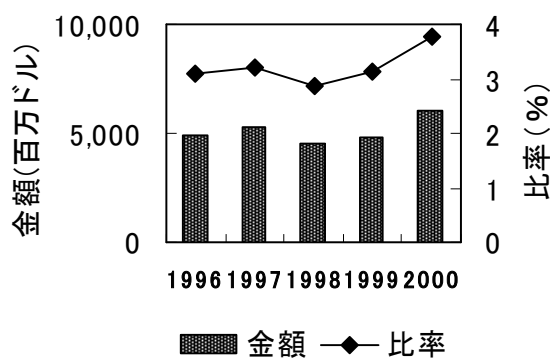


図 8 テキスタイル製品の輸出動向

図9は1999年におけるテキスタイルの地域別輸出高を示す。輸出高が約48億ドルであり、そのうち、西欧が1/3以上の38.9%を占め、インドにおいては西欧は上得意様である。以下、アメリカを中心とする北米(23.2%)、そして日本を除いたアジア(19.7%)、そして我が国である。我が国への輸出金額は158百万ドルと決して多くはない。その比率はわずか3.3%である。

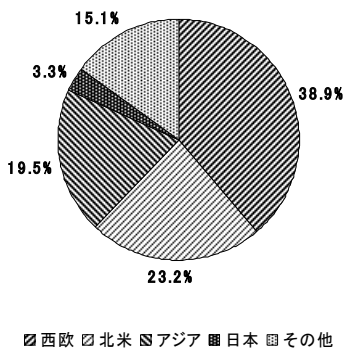


図 9 テキスタイル製品の輸出先とその比率

(2) アパレル

図10は1996年から2000年までの間のアパレル製品の輸出状況を示す。この5年間に輸出金額は1996年の40億ドルから60億ドルに増加している。しかし、その比率はわずか2.5%から3%程度と全世界からみるとごくわずかである。

ここで1997年および1999年が前年より輸出金額が増加する、あるいは前年並みであっても比率は減少傾向を示している。このことはインド以外の国々でもインド以上にアパレル生産への意欲が高いことがわかる。

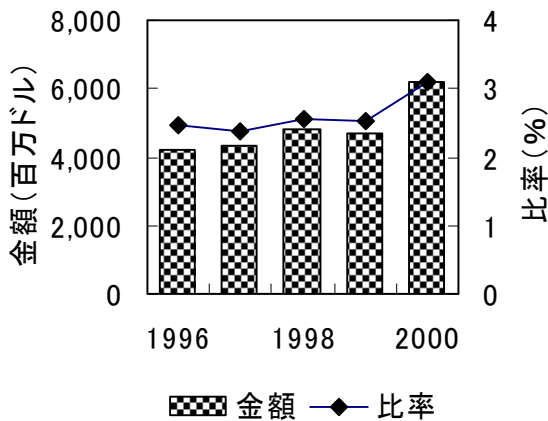


図 10 アパレル製品の輸出動向

図11は1999年におけるアパレル製品の輸出状況を記す。テキスタイルと同様に西欧、北米で全体の70%を示している。我が国へはわずか1.9%程度輸出されているだけである

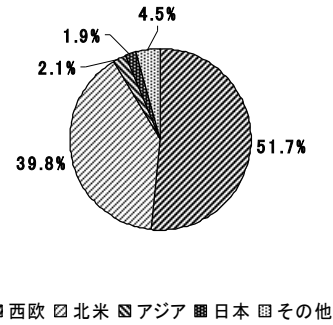


図 11 アパレル製品の輸出先とその比率

4. 縫製工場視察

(独)日本貿易振興機構岐阜情報センター所長斎藤俊樹様のお取り計らいでニューデリー市内の2つの縫製工場を視察した。以下に概要を述べる。

(1)New Era Exports

最初に訪問した企業である。1988創業である。気のついたことを列挙する。裁断作業が地下で行われていた。このことはたぶん、重量のある布を上部階で運搬するより、地下に投入した方がはるかに楽であるからと推測される。地下で裁断された各パーツは必要枚数分1階、2階で運搬されている。設備面では延反機は設置されていなかった模様である。縫製工程では圧倒的に男性社員が多いことに驚いた。(我が国では縫製作業は女性が主に従事しているが)、また、設備は決して新しいとはいえず、自動糸切りマシンも使用されていなかった。訪問した当日の生産している服種はアメリカ輸出の女儿用夏用シャツであった。特別な生産技術を保持していても生産が行える簡素な服であった。その他、紳士服、婦人服、子供服などあらゆる服種の生産力がある。

図12 その1 に一例として縫製現場を示す。図13その2 に検品業作業光景を示す。首からメジャーをかけており、いつでも最終寸法を確認できる作業体制である。



図12 縫製現場 その1



図13 縫製現場 その2



図15 縫製現場 その4

(2)GOLDLINE EXPORTS

2つ目の工場である。この工場は前述の企業とは全く正反対で設備はかなり投資の後が見られ、縫製している服種も多岐にわたり、かなり高級品の雰囲気を感じた。この企業は紡績、織物、ニットなど総合繊維企業であり、この縫製工場はその一部である。生産する服種は紳士・婦人カジュアルウエアである。投入する原反の受け入れ検査の一部として自家製の光源装置で検査を行っているとのことである。図14縫製現場その3 は自家製光源装置を示す。アイロン工程にもかなり配慮がなされており、重いアイロンの上げ下げを補助するためにバランスを取り付けられていた。



図14 縫製現場 その3

5. 今後の展望

このようにインドにおけるテキスタイル、アパレル産業は非常に盛んであり、今後もこの傾向はますます強くなることが予測される。インドの恵まれた点はなんといっても世界第7番目の広大な面積、2番目の莫大な人口を保有していることである。このことは今後の発展が大いに期待されることである。現在、BRICsということばがよくつかわれている。これはブラジル、ロシア、インドそして中国の頭文字を集めた呼び名である。これらの4カ国の人口は約27億人と世界の4割を占めており、その豊富な労働力などを背景に21世紀の経済大国として世界をリードする存在に成長するだろうと注目されている。ちなみに2039年には国内総生産の合計規模で現在の経済大国「G6」（米国、日本、ドイツ、イギリス、フランス、イタリア）を抜くと推測されている。さらには2050年には新たな経済6大国が中国、米国、インド、日本、ブラジルそしてロシアの順に入れ替わるといわれている¹⁾。このように21世紀のリーディング国になる素地がある国である。そして、公用言語が英語である。テキスタイル製品・アパレル製品の輸出先は北米、西欧で70%を示している。また、我が国からずいぶん遠い国家であるとの思いがちであり、アクセスの点も検討しなければいけないが、西欧、北米より、我が国の方が近い。

さて、テキスタイル、アパレル分野に目を向けると、これまではWTO(世界貿易機関)の繊維協定(ACT)により、輸入割当枠があり、仕向け先の輸入量の枠に制限があった²⁾。しかし、2005年にはこの繊維協定が終了する。それゆえ、テキスタイル・アパレルの大競争時代に突入、中国とインドが席卷すると予想されている。米国において、衣料品の輸入は中国16%、インドが4%である。輸入割当枠が撤廃されると中国50%、インド15%、(中国は3.1倍、インドは3.75倍)になると見込まれている。EUにおいても中国29%、インド9%に拡大するものと見なされている。また、参加したATC会場内のプロモーションビデオでもインドのテキスタイル、アパレル産業は大成長し、織

維強国になると熱っぽくアピールしていた。

このようなことから、インドのテキスタイル・アパレル産業への関心をこのままにしているのは不都合であると思われる。現在、アパレル製品の海外生産は中国が圧倒的に多い。今後もこのまま、中国生産にゆだねてよいか、インドでの生産も視野に入れるべき時期であると思う。インドは前述のように言語が英語であるので我が国にとっては入りやすいと思う。唯一の課題は中国より遠方に位置し、アクセスの面で難があることである。しかし、すでにアメリカ、EUでは活発なビジネスが展開されているのでこれらの諸国と比較すれば決して遠くないと思う。我が国の文化のふるさとの中国とは別のインドのテキスタイル、アパレル製品はどことなく、エキゾチックで目新しさが消費者の心をとらえることができると思われる。今後、各企業の進展を期待したい。

6. まとめ

第7回ATCに参加の機会を得て、その準備段階としてインドのテキスタイル、アパレル産業の現状を調査した。その結果、いずれの工程においても過去数年間にわたり、生産量、産出量が増加・増大していることを明らかにした。つぎに2つの縫製工場を視察した。両者の設備、生産は意外にも大きく異なっていたことを知り得た。最後にインドは「BRICKs」の一員として今後の活躍が期待されている。なお、第7回ATCの概要は既報³⁾を参照されたい。

謝辞：2つの縫製工場訪問にあたり(独)日本貿易振興機構岐阜情報センター斎藤俊樹様にはたいへんお世話になりました。誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 1)中日新聞：2004年11月10日
- 2)織研新聞：2004年9月30日
- 3)野田：消費科学、45、145(2004)
- 4)繊維ハンドブック：日本化学繊維協会

(提出期日 平成16年11月26日)